

# 建学の精神

学長 藤原了然

全佛教大学の総意を結集して、伝統ある〈佛教大学学報〉が、装いを新らたにして公にされる運びに到ったことは、まことに喜ばしい限りである。想うに、佛教大学の歴史は遙かなるものがある。従つて、佛教大学の今日に到るまでの歩みの足あとは、まことに色彩豊かなものがある。遠く江戸時代にさかのぼる浄土宗僧侶養成のための専門道場としての時期は、しばらく措くとしても、明治期に入つての教育制度の改革によつて、佛教専門学校を公称してからでも、ここに六十有余年をけみしている。

この間における佛教大学の時機相應の在り方は、その外觀や内容について一言につくされうるものではないが、ただ佛教大学の創建以来一貫して変らぬものが一つある。それは佛教大学の建学の精神として、今までにも、現在も、そして将来も、佛教大学が世に誇るべき佛教精神そのものである。この佛教精神による人材の養成を志すところに佛教大学の存在は永遠の意義をもつものである。

一口に佛教精神といつても、その内容は極めて広大にして深遠である。いま一例として經典に示さ

れている最も著名な〈三獸渡河〉の譬を挙げてみる。要略していえば、〈三獸渡河〉とは、人生の在り方を、獸が河を渡る場合を例にとって三通りに大別して、人々に人生の確たる歩み方のあり方を説いたものといえよう。「ここに、兔、馬、象の三種の動物があげられる。この三種の動物が、河を渡るとする。兔は小さい動物であるから河の表面を泳いで行く。河の流れがあるから真直ぐに目ざす河向うへつくことは出来ない。かなり河下の対岸につく。馬は体が大きく足が長いから、半ば河底を踏み、半ば河の流れに左右されて、やや河下ものの対岸につく。一方、象は巨大な重量と大きな足をもっているから、少々の深みはものともせず、しっかりと河底を踏んで、河の流れに支配されることなく、目的とする真向うの対岸に行きつく。」

經典の別のところには「如来の歩行したまうは象歩の如し」といわれている。世の雑音に煩わされることなく、徒らに背のびすることなく、常に大地を踏んで、自信をもって真実の自己を開顯していくところに、如来の歩行、いいかえれば、あらまほしき〈人間形成〉のすがたが具現するといふのである。

〈物は栄え、心は枯れる〉といわれる昨日今日、このことは肝に銘じて再思三省さるべきではなからうか。佛教大学の現状に、この佛教精神が、完全に具現されていると自負するものではない。しかし、少くとも、この佛教精神が、佛教大学の体内に脈動していることを確信したい。ここにこそ、質と量とを通じて、佛教大学の明日の躍進が約束されているといえるのではあるまいか。

このたびの〈佛教大学学報〉の小冊子が、佛教大学の内外とに向つての佛教精神の宣揚に、いささかなりともの寄与することをうるならば、喜びこれにすぐるものはない。編集諸氏の労苦に甚深の謝意を表するものである。